歌十五

長明文記抜

宗

鴨長明方丈記之抄

鴨　里之名也　昔城北出雲路有小女浣衣鴨
河一盥則流來鴨羽加器女取歸家掬之擔水
已而女娠產男又每問其父女曰無父每以爲匿而
不言兒三歲時又每議以爲世豈有無父之兒哉
思此里人乎宜具酒膳宣里老人令兒持杯試告言
父此杯置汝父所其得杯之人乃兒父也於是大
會鄉人數爵後令兒送杯兒取杯立分鄉人出
堂置簷上鴨節所父母及諸人怪異僉曰此矣
鴨羽宜姓此兒爲賀茂氏於是兒化爲雷上
天與母俱昇矣

長明　吾妻鏡第十九云　建暦元年辛未十
月十三日辛卯　鴨社氏人菊大夫長明入道（法名蓮胤）依
稚經朝臣之舉予此間下向奉謁將軍家賢朝
及度々之召而今日當幕下参軍御忌矣彼
法花堂入念讃讀經之間懐舊之涙相催註
一首歌於堂柱
くさもまもなかれぬるかな
もるものはよこけをたれ
千載集をえらばれおわりて
一首入ものがたりのこと
ものがたりのこと

詠ちていつるまことなりける　鴨長明
みのうきもうき身の霞を尋ねて

新古今集　鴨長明

秋風のいたりいたらぬ袖はあらじたゞわれからの露の夕ぐれ
なかむれば千々に物思ふ月にまた我身ひとつの峯の松風
松島や塩くむあまの秋の袖月ハ物思ふならひのミかハ
此ほかあまたあれども略之
長明筆作ハ無名抄四季物語方丈の記なとさま〳〵ある中に
有し長明が方丈の記とかきしハ建暦二年今上の時
暦二年までハ年数合四百四十五年よりあまる也
記といふハ長明の住る所の都の東

外山の記にいふ方丈の記ハ
の年代もなし長明ハ後白河院の保元
時代より二條六條高倉安徳後鳥羽土御門順徳
迄の頃を経られ保元の軍平治の乱治りてのち
源氏の世となりて実朝の時に関東へ下りまかれ
方丈の記ハ維摩詰妙喜国より
丈四方の室に入りしを以て維摩病に臥せし時に
如来文殊師利を以て菩薩とせし摩詰の病をとひ
給ひしのことや維摩經曰爾時長者維摩
詰問文殊師利言仁者遊於無量千萬億
阿僧祇国何等佛土有好上妙功徳成就

師子ニ座ス文殊師利言居士東方度三千六
恒河沙国有世界名須弥相其佛號須弥燈
王今現在彼佛身長八萬四千由旬其師子座
高八萬四千由旬嚴飾世界於是長者維摩
詰現神通力即時彼佛遣三萬二千師子之
座高廣嚴淨來入維摩詰室云云下略之
記ハ文の一代ハ[illegible]ことこそ
明暦三 丁酉 歳 十一月 日

めの川のおんなりなんとして　論語子罕篇云
子在川上曰逝者如斯不舍晝夜云云
長明の和歌よむでうたれた論語
とあてとかうんちく人
ロ孔子ハ川ハ流れ[illegible]
のもじとあるおなじこと
うくくしやくのうりもの
いせ中ハ人をとゝのの
ぬ[illegible]ものあれとうとこと
ろくくしやくうり
ゝ　浪　なの[illegible]
ゝ[illegible]

ぬ川のなかれ乃ものれい後ゝてまつもの
ゝのもどりこゝひらかゝこゝ
つゝゝゝのひとゝ　ぬくゝとあるう
ゝ　世中おもゝ人をとゝみとゝ
ゝ　ゝ　ゝの歌乃ゝれひとゝ
いゝゝまゝゝ　ゝゝゝゝ
乃ゝ[illegible]ゝ代ゝくゝさせゝのゝれ
ど　ゝれゝ[illegible]ゝゝれが[illegible]
ゝ　ゝ[illegible]ゝゝ
ゝゝゝゝ　ゝゝゝゝゝ

十人が中よりまれにひとりふたりなり
ことばにおろかなるべからず
泡よりやうやうけるものとしるべし
人がたかうまれくるまれくるかたもまた
らどうのやうにうまれ
あるものしらずまれくるかたもまた
いづくにか生まれ
どこにか死ぬるかしらず
知らんやまたまれくるかたもまた
いづくにか生まれ
いづくにか死ぬるかしらず
知らんやまたまれくるかたもまた
いづくにか生まれ
いづくにか死ぬるかしらず
知らんやまたまれくるかたもまた
いづくにか生まれ
いづくにか死ぬるかしらず

白居易詩云二十年来旧詩卷十人酬和九人無

荘子曰朝菌不知晦朔注云朝菌大芝也朱絃曰夕生暮生見日則死

佛書云先生又先

生都不知生生前來
世猶來世全無辨世
世終云云

又ちくさぐ　そめのちくさ
しらるるかあらそれさらう
うのやどる　李太白
春夜宴桃李園序曰
夫天地者萬物之逆
旅光陰者百代之過
客而浮生若夢

そのうとしてみのこせきを
をあくそひ去ばひとの行
がはの流るごとくなり
いとでとらめくへでこうる
ふくしたのの戸よめんや
のやとのくいとびてくに

いくそばくぞびたびたのかすの
ちそ焼さうもそ外いうどもとうもどもどもく別れら
三分ぐりよなぐ　こうぐ男女死あるうめ
数子人ある牛のあひとうとうとうとび
人ひとうとみかはるる中ぬすとあ
やうに京中のあとと仰るやうて給ふと
貴しひとんと聞のとうとうとうとぐきてのぐ
らうあくそ作るべうりの治部卿宰相殿
世九日のうちぼれ門京極の殿ちうと人
るうとはいちうくぞ楽ちうまでいうめ
しうくぐくるとうとうぞ町とうけく

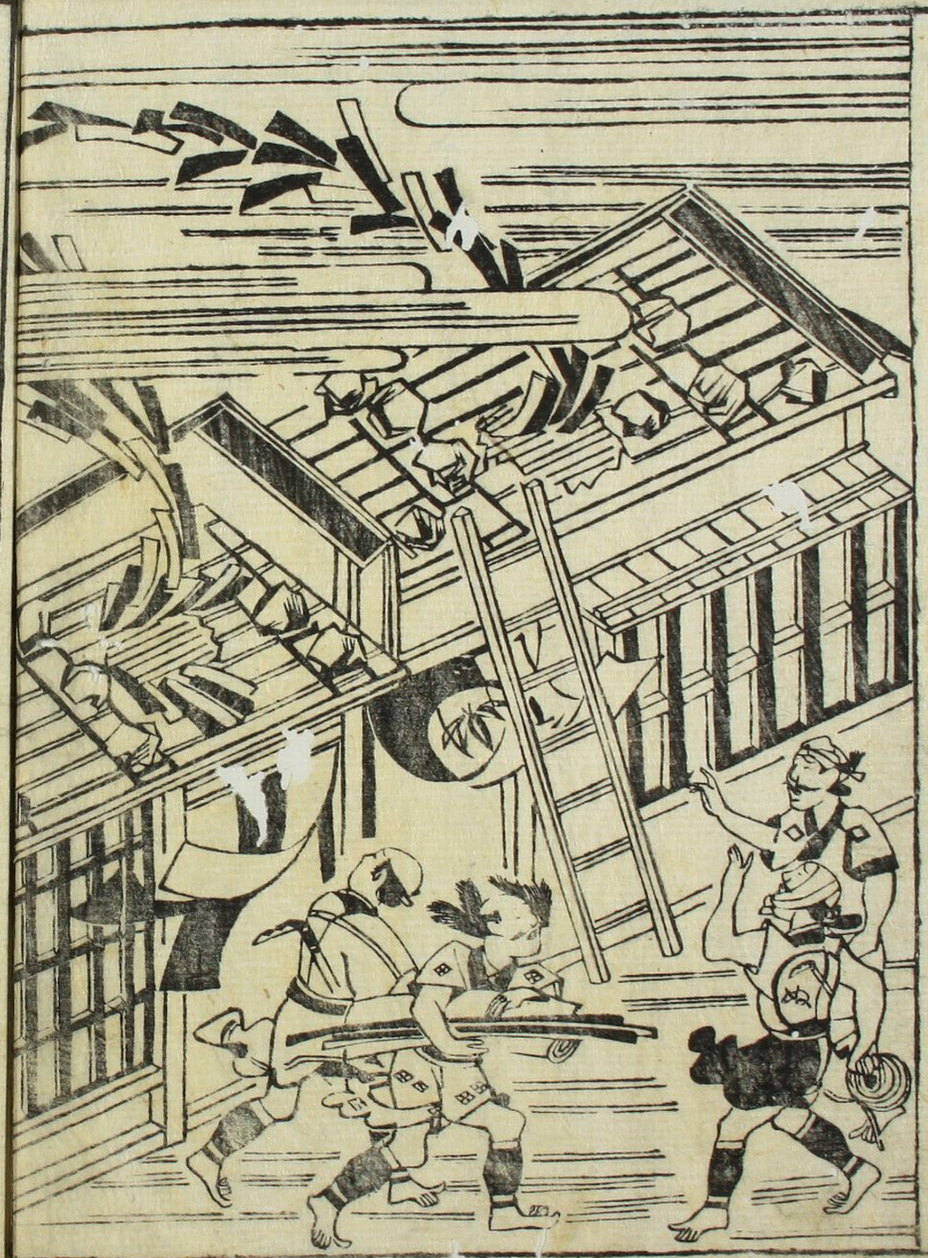
しそその人を見あかしおもふを
そこのさへのうちさきぬ
きこえんぞかし
あるは絵あそびく　出絵と
あるじかたへ絵を(すこし)見る
みなくさらものこころある
じんの死のまへ見おどろく
まさみのされ給ひと見え
たかくこその絵をやがく
らずまあるのえとまらへ
くずまあとさればれ
じのされとされとぞの
あそびとはなにぞかく
あるときおそく
絵にかれゆかべてまのも
とかしとぞかなれと

吹きくるかたにも中なお絵をかさ
あのかるもちうる死をと一ヒてやぶれどもいまい
あしさかしのかなおもとさるとうかか
きこえしらずりあまりてこそもいのとは
と吹きかへらくとらすか給ひてさみのの絵を
とさもりひく瀧とひとりかさるほと
んやもみのちらの絵あるいかべとはかうつ見
おあづり松はうき桜乃ゆきひ。竜の本乃
絵かのかさに乱さいかぞうし。霧と燈のど
たるさそされはまぐく月もみしにてび
あるかくあり見よむきかおもいで

ゆふゑど比叡乃峯風あやしくものぞくそ
いとぞ光えくるもれの夜そなるのこと
らべされとさるうちのあるにあるをそこと
ひとさらかるいかぞをまつさらばは風ひ
清ささるのくはつるてあはくの人へ
絵さぶかまめり辻風は清かのなかれ抱あれど
うかるやいあまりてこと抱ぞさるべき抱て
さかくうふかぞてくるひ侍りし又あかし
年の水無月の頃すみかた都遷り給ふを
さらとせかひの名あるりしことたうことは東
のかじめをとらかば摂州天うちかうかん(二のきさき)明

絵とのくるとのかくいちら　をとをよ
給のくみをさまりし
つきみおもしおり
まかれとある　まかれを
いるにのまそのそそそう
まとかにぞいそれの絵
とのあまいられつまれ
子の絵かのひまれ絵
絵あるべし
や　断絵あり
安元　高倉院之年号(ネンガウ)
也此年治承ト開元(カイゲンス)
都のうち　即編呂東京路之
朱雀門　拾芥云長安
南面皇城門是謂朱
雀門

大極殿　同云朝堂院
正殿名云八省院是
又謂之最大殿天子
臨朝即位謂司告朝
政或云虵朝堂院
大學寮　縱壬生横二
條西南角也
民部省　縱西洞院横
春日東北角也
一条通に原とかるる
阿房宮賦楚人一炬
可憐焦土
堀出冨小路　後宮か
後壬生あるよあれるもの
よるとこもわ中世年とと
すべあいの家小路か



楼台は家の〔…〕
小殿なり
よろこびのほどにと
あめのしたあまねくおさまりぬることを世に
世の中は天下の事
映して
〔…〕
と長明が〔…〕
七珍万宝 〔…〕
灰燼 燼はもえのこり 灰燼は火之

都をうつされし人の〔…〕
〔…〕
〔…〕牛車
〔…〕
〔…〕南海の〔…〕
〔…〕
〔…〕
〔…〕
〔…〕東海〔…〕
〔…〕

餘赤ソ須和名なりえ
くわしくはしるせり
數千人 數は〔…〕
治兼 鄙倉院年号也
中御門京極 これを當
〔…〕京極〔…〕
〔…〕
とよむ 磐 〔…〕
〔…〕
〔…〕
さし
僖公十六年
左傳 是何祥也
此京の始 桓武天皇延暦三年十月二日奈良の京春日より山城国長岡に遷て

〔…〕は山の中なれば〔…〕
〔…〕
〔…〕
〔…〕
〔…〕
〔…〕
〔…〕
〔…〕車〔…〕
衣冠〔…〕

[illegible]

又延暦十三年十月廿二日
長岡京より此京へ遷て
帝王は廿二代星霜は二百八
十余歳の春秋を送られ
その末代の源平両家
の勝負いくさ保元平治
を始として大臣公卿
たのしみ人臣に至るまで
天下の乱にあひ人の
人民とも化城の程をとき
せはく殿の内兵を納め
て東山の辺にあつまるに
陣をかまへられ天下の事
ことくく綸言を鳴動せしめ
ずして今にいたるまで公家の
地となれり

然の像里ありて武士おこり世の
つゐにゆる武士の世となれる世の
乱れの始なりとかや此こそ乱世と
清く世中しつまりて人の心をやすめる
民の楽みたのしみかへる事も
のなき状も忍とおもふまじけれど
こゝろをつくしてかなふべきこと
とくさりしのなかにしかれとも人
のまなひこゝろの生死の本をも
そこはくの人のいのちをたすけて
とほく都は此いくさにて天下の
とゝのへ政のとゝのふ事をつとむ

る籍のごとくなるべし
卑しき身とても分
これ乱世のならひとおもひ
あれはおのれの分をしれ
農はたゞよく耕すべし
おろそかなるべし
それ世のつねのことわり
あきらかに知るべし
いふなり
本の元夜 あさくさ
いにしへ天皇の御字
既に年々よりあれば
おのれの世の乱
聖の王位の御代に
民の心あり
小倉の民の百姓

うけたりあたりつきぬとへいるものたれ
これ民をあはれむといへども
どの世中のおさまりかたきはなき
知るべし文武の道はかなふものぞ
まことにふたつながら二年の例を
世の中の道をたゞしてまことに
状をおもひ民をあはれみ
先王のことを教へて身の道に
しるし耕しつくるを本とする
て飢ゑぬやうにすべし。これによ
りてその民の地を捨て帰とせず

[illegible]

[illegible]

[illegible]

…飢死(うゑじに)すれば… [illegible]

…世の人 [illegible]

[illegible]

史記秦李斯諫二世曰
堯舜采椽不刮茅茨
不翦飯土塯啜土形
六韜帝堯王天下之
時金銀珠玉不飾錦
繡文綺不衣奇怪珍
異不視玩好之器不
寶淫泆之樂不聽宮
垣屋室不堊甍桷椽
楹不斲茅茨偏庭不

[illegible]

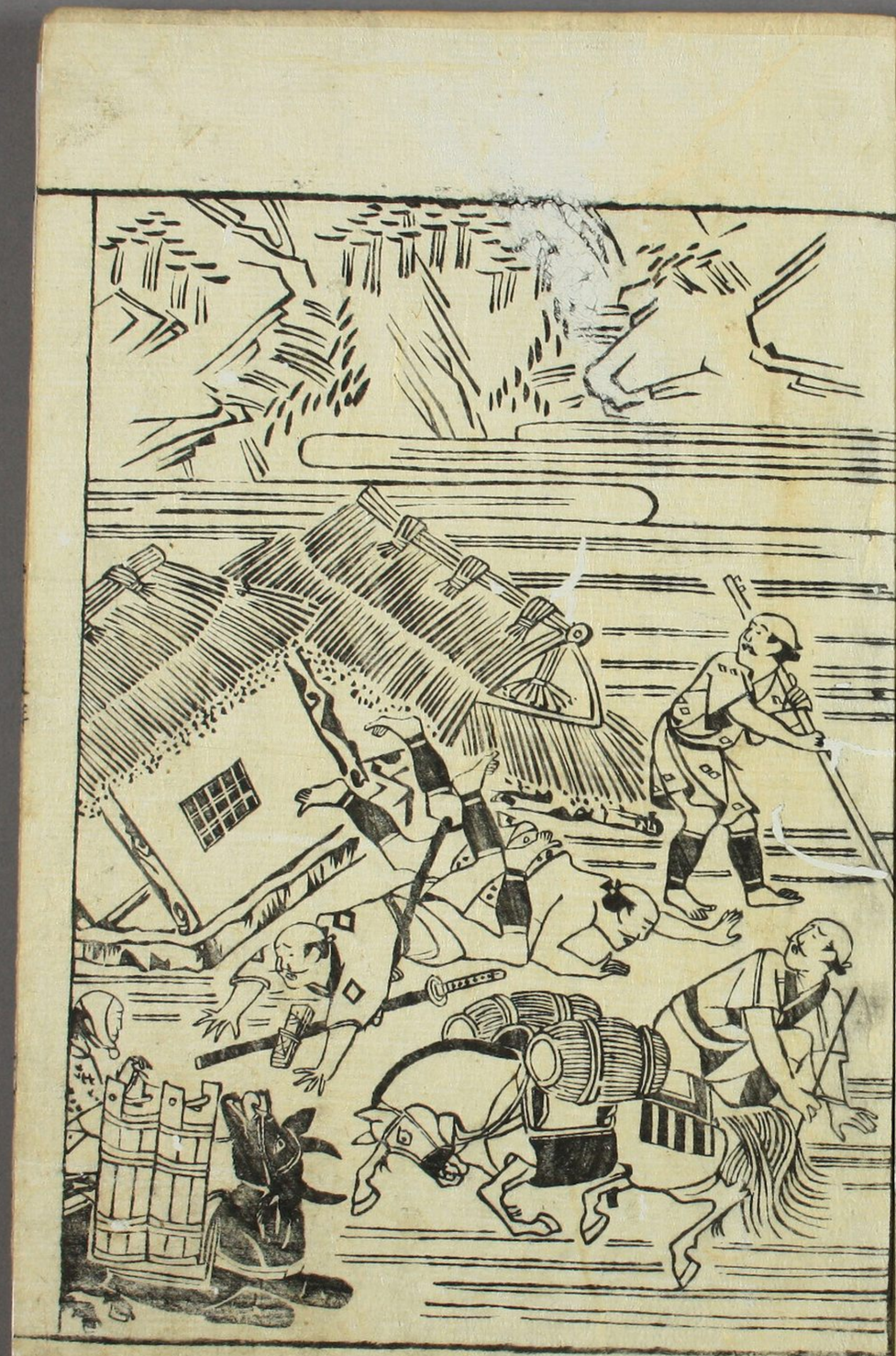
獨身は世を[illegible]
[illegible]
されバ父母あるものハ[illegible]
親をさき立て死にいたる[illegible]父母の命[illegible]
子をその親房[illegible]

粥 [illegible]のをりしも[illegible]
のぼりてみすゞ[illegible]
[illegible]
養和　安徳天皇年号也
[illegible]
穀 枝木 薪
[illegible]
[illegible]
節義之事也　曲礼
君子雖貧不粥祭器雖寒不衣祭服
論語子曰師摯之始關雎之乱洋洋乎盈耳哉

るなどもありけり仁和寺に隆暁法印
といふ人かくしつゝ数もしらず死る事を
かなしみて其首
の見ゆるごとに額に阿字を書て縁をむすばしむ
るわざをなんせられける人数を
しらんとて四五両月をかぞへたりければ京
のうち一条よりは南九条より北京極よりは
西朱雀よりは東の路のほとりなる頭
すべて四万二千三百余なんあり
けるいはんや其前後に死ぬるものも
多く又河原白河西の京もろもろの辺地など

[illegible]
古語曰今日過命亦減隨少水魚是何樂
列子云齊有貪者常欲得金於攫[illegible]天下莫[illegible]是
[illegible]

を加へていはゞ際限もあるべからず
いかにいはんや七道諸国をや崇徳院
の御位の時長承の比とか
かゝるためしありけりと聞けど
その世のありさまはしらず
まのあたりめづらかなりし事也又元暦二年
のころ大地震ふる事侍りき其さま
世の常ならず山は崩れて河を埋み海は傾き
て陸地をひたせり土裂けて水湧き出で
いはほ割れて谷にまろび入る渚こぐ船
は波にたゞよひ道行く馬は足の立どをまどはす



仁和寺隆曉法印　赤考

阿字八識所中ノ字ノ字力生死涅槃不離
又曰阿本不生新羅
國靈妙寺僧不可思
議釋曰秘密中ノ秘釋
者阿字自說本不生
ノ義　ハ偏くとて乾
くこと比なり
元暦　後鳥羽院年号也
ひとりのきくりしとうこと
莊子胠篋篇云夫川

竭而谷虚丘夷而淵實といへる詞等に
にたれども　今此世には
さもあるべき事なり本意
その[illegible]ものなれば
などふりておそるべき
ることと　地震はなゐともいふ
これは俗にゆるともいふ
是地のふるふとくゆるて
四大種　地水火風也
齊衡　文徳天皇年号
也此地震齊衡二年
五月五日也同三年
三月大地震也
東大寺　大和國也聖
武天皇神龜五年始

築地のおほひの下に小家を作りて。
はかなげなるあとなしごとをしてあそび
侍りしが。俄にくづれうめられて。あとかた
なくひらにうちひさがれて二の目など
一寸ばかりうち出されたるを。父母かゝへて
声をおしまずかなしみあひて侍りしこそ。
あはれにかなしく見侍りしか。子のかなし
みにはたけきものも恥をわすれけりと
おぼえて。いとほしくことわりかなとぞ見侍りし
かくおびたゞしくふる事は。しばしにて止
にしかども。そのなごり。しばしは絶ず。よのつね

造之七大寺之一也七
大寺ハ　東大寺　興福寺
元興寺　大安寺　藥師寺
西大寺　法隆寺也
あぢきなき事とはものゝ
はかなき事をいふ　佛名
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
ありとなり

おどろくほどの地震。二三十度ふらぬ
日はなし。十日廿日すぎにしかば。やうやうまどほに
なりて。或は四五度。二三度。もしは一日
まぜ。二三日に一度など。おほかたそのなごり
三月ばかりや侍りけん。四大種の中に。水火
風はつねに害をなせど。大地にいたりては
ことなる変をなさず。むかし斉衡のころ
とか。大地震ふりて。東大寺の仏のみ
ぐし落など。いみじき事どもはべりけれど
なほこのたびにはしかずとぞ。すなはち
人みなあぢきなき事をのべて。いさゝか心の濁

莊子曰堯觀乎華封人曰嘻聖人請祝聖人使聖人壽堯曰辭使聖人富堯曰辭使聖人多男子堯曰辭封人曰壽富多男子人之所欲也汝獨不欲何邪堯曰多男子則多懼富則多事壽則多辱是三者非所養德也

[illegible]

三議師魔而惡乞生
出家將離生死乖於
魔意故魔而怪師魔
又出家破身口七支
之惡故云破惡乞生
謂上於諸佛乞法下
於衆生乞食也

古今集

世にふるものゝ山ぶみ
ものゝ人の歌の

日野山 鳴のあるるこゝ

一赤考

闍伽 あるこゝかいるた
おこし 闍伽ゝの梵語
阿弥陀 普賢 不動の
ものゝ十三

十三仏名 不動 釈迦
文殊 普賢 地蔵 弥勒
薬師 観音 勢至 阿弥陀
阿閦 大日 虚空蔵也

往生要集

作法也

ありとつぎ 誹諧　今は
世流三条派などのまれ
ところに物…たのむた
くひるべしもさまた
よりゆんおる…

はい縁 家のまれる
べし

はら家 家のまれる
べし

かえ 文机や

ともろ 煙く
よまろ ゆきのあり

あかるき とりしき花
あり

花と柳山とふ字本のろ
ら 古今れ…の中

[illegible]

[illegible]

潯陽の江　白居易琵琶行
潯陽江頭夜送客　楓葉荻花秋瑟瑟
なりと誦じて琵琶をきくところなり

こうぜんとやしなふ
孟子曰我善養吾浩然之氣
はれしあるときは
つよくはなはだおほきさ
きはまりなきところ二気あ
まさにはさむはきなり
なべしまくそれが
のきなり

友なりけり。時文に無言をせざればとても。ひ
とりをればひとり口業をおさめ清べし。いかなれば
禁戒ともなるゆゑしたるけれ一元給お
なくれば独り行くやうにんなれば乃
白波よ水をよぶる舟中商客の舟
行きかふ舟とあがんにく。満汀の風情
とおすこり。樵の風ちらとあるまと
夕くれ。潯陽の江をおもひ出りて源
終夜ねむられとあるふりしおりの興
あまたかく松のひびき旅情の楽を
しるべの言は流水の曲とおや
清き調をこれにくまはずひとの琴
と悦びしんともあるまどひとりあり
ひとり詠じてたびらんとやすらふ
并に文集は一九紫の屋あり合に
山鳥が居るところ。これが寺とあり
時もあまく物替り。はれしある事へ
これと友として遊びおりて。これは十六
歳されば千ちぢ乱るる孫あれども
あそびむるるはこれ同じ。此は清流を
わすれ又君なしとこれ又わくことより折
とはむ。此ちまこそいの田舎するうち

[illegible]の[illegible]て　攀上と
くゝり

[illegible]情山　山城　拾遺集

[illegible]

人丸

[illegible]　山城

[illegible]

[illegible]

[illegible]　山城

[illegible]

[illegible]

[illegible]　後撰

[illegible]

[illegible]

[illegible]

勝地本來無定
主太都山屬愛山人
朗詠中と出てう白居
易

とと山　とと山の名とい
つるかとやとと山なのの
ち山嶽ちう　續古今
　　菅原孝標
とと山の松とこの名にな
ほとそ中とたえたの山下

笠丸　山嶽　ちう　九方
面にて縁をしりて笠丸
山にてちうみちをあきん

宝石　山嶽　本ちる観音
ちう山　名石　縁起見文書
　　新古今　菅原孝標
新古今人やまうん石山宝
殿中のちれる物の和れ月
文殊庫　宝石　山王九宗
のとき文殊庫に保存
よなるの人文殊庫と
ふとうや　後撰才三
せたとえくあつれりれ

とと。ぬもうてうさふるとひどふくちう
乃新ちうとあそんれしよつきくこと。山中よ
京都打よつきくこと。ぬとあ
いそんやふくありひ。浦くたん殺人の庵
ちふ。れみとくぐくしぐ。ぬくこ山ぬた
仏教しけ仏地とありひ。ふ。今色
よ文文世戒絶ちり。彼の居ちやくる
屋とちるて。物ふくちふ。ふ。居
苦ひぜちとのづくるの仮ち物ち
しは山ち絶ふくぬやんどちさんの
くれるつちあまくこ。ぬまして

猿丸翁　倉坂蟬丸仁明天皇時之道人也常不剃髮世人號翁亦仙人ともいふ　名称は日本紀に見えたるの説有り　ものの形丸なるゆゑ　てそこにくくりてとこのかたちにしたがひてとるべしいとをもとるなりかみをむすびさげみかみの形に似たるゆゑ　此世の人貞観十年ころ　このとき　いくくしてはは

猿丸太夫　古傳云時代不詳或系圖云用明天皇聖徳太子山背大兄王号猿丸太夫　無名抄云ある人あるべきのかたちにあらそばくとも云ありそこに猿丸太夫ありけりとひとりそこの事ありけりとこれをもとの事なりとぞ

猿の声　謝靈運　哀猿啼月

ふるのたかの
かなしとあかしかもなにをけりちりそそちりそそちりそそ

[illegible]の戸　集　文本集

西行

[illegible]

源氏[illegible]

[illegible]

[illegible]

心心外無別法

元命とゝのゝるゝことゝゝろ
烈ゝまゝよりゝう
恒ゝどゝてゝれゝるゝとゝさん
如人飲水冷暖自知
とゝいゝるゝん
拾遺の云ゝゝゝとゝくい
ゝゝゝひゝとゝゝゝゝゝゝ
いゝゝゝゝゝゝ

人名衆生相對境取
捨分別名壽者相是
謂凡夫四相終行人
亦有四相心有能所
輕慢衆生名我相恃
持戒輕破戒者名人
相厭二途名額生諸
天是衆生相也心愛長
年勤修福業諸執不
忘是壽者相也有四
相則衆生無四相助
是佛也又曰無復我
相人相衆生壽者相
無法相亦無非法相
何以故是諸衆生若
心取相則著我人衆

生壽者若取法相則
著我人衆生壽者何
以故若取非法相取
著我人衆生壽者是
故不應取法不應取
非法以是義故如來
常說汝等比丘知我
說法如筏喻者法尚
應捨何況非法

淨名居士　維摩詰
周梨槃特　仏在世の
の人ありしとも
はじめなりしと
はなれの山のもとにすまひしかりきとも
とおもへるなれはいかなるもの
とおもへるとなれはいかなるもの
のちはやんとおもふもいとこそ

明暦六戊子正月吉日

長谷川
市良兵衛開板